

春望
はるのながめ

國破山河在
くにはくずれて
やまかわのこり

城春草木深
はるのまちには
きやくさばかり

感時花溅泪
ときをうれいて
ちりゆくはなよ

恨别鸟惊心
わかれにやんで
なきたつとりよ

烽火连三月
のろしはすでに
みつきにわたり

家书抵万金
つまのたよりを
ただまちわびる

白头搔更短
しらがあたまは
かくほどぬけて

浑欲不胜簪
もうままならぬ
かんざしさえも

春望

国破れて山河在り、城春にして草木深し。時に感じては花にも涙を溅ぎ、別れを恨みても鳥にも心を驚かす。烽火三月に連なり、家書万金に抵たる。白頭搔けば更に短く、渾て簪に勝えざらんと欲す。

*「国破レテ山河アリ」でお馴染の詩。同じく幽閉中の作。公私の嘆きが一首に収まる。「春望」という何でもない題が、この詩の悲壮感をより深いものにして